

第 21 回 結婚・祝言・婚姻という新たな門出の古い伝統の話

1 千家ご夫妻のご結婚

今月 5 日、出雲大社の権宮司である千家国麿氏と高円宮典子女王の結婚式が出雲大社で行われ、その後の披露宴、皇室のお食事会も滞りなく行われました。まずは、この場をお借りして、奉祝の意を表したいと思います。

さて、ご結婚の日までは、新婦典子さんの方が「高円宮典子女王」ですから、当然敬称は「様」になり、ご結婚後は一般の権宮司の妻ですから敬称は「さん」になります。

以前、旧姓川島紀子さん、現在は秋篠宮紀子妃殿下がご婚礼を新宿御苑で挙げられたとき、当時NHKで中継をしていた松平定知アナウンサーが、その大役を終えて「『さん』と『さま』の使い分けが完璧だった」という感想で自画自賛したのを憶えています。この敬称の部分は、日本では非常に大きな問題です。特に家柄が重要視される場合は、本人同士はよくても、ほかの人々においては非常に気になる場所なのです。

結婚というのは、日本の場合「家」と「家」が一緒になるということになります。ですから、結婚を正確に理解するためには、日本人における「家」という概念を理解しないといけません。

結婚をすると、女性が男性の「家」に入るとされています。これを「嫁ぐ」といいます。「嫁ぐ」ということばは「嫁」ということばを使いますが、ではなぜ「よめ」というのでしょうか。「家」ということは少し後にして、考えてみましょう。

これには諸説あり、「呼んでくる女性」として「呼女」、または子供を残すという意味で「夜の女性」で「夜女」、場合によっては家に吉を讀んでくる女性として「吉女」ということが語源になると考えられています。

このように諸説あるのは、昔は「側室」など、男性 1 人に対して多くの女性がいた場合が少なくなく、それが最近まで続いていたことによるのです。

要するに 1 人は「呼女」で、正室は自分の家柄を上げるための「吉女」、そして寵愛を受けるのは「夜女」というように、男性が多くの女性を相手にすることが光源氏の時代から続いているので、単純に「嫁」といっても語源が一致しないのではないのでしょうか。

では、その「嫁」になることを「とつぐ」といいますがこれはどうなのでしょう。

「とつぐ」とは「外」「継ぐ」という漢字が当てられることがあります。これは、自分の生まれた家ではない「外の家」の後をとる、「継ぐ」という役目を負わされるということ

す。つまり結婚して嫁になることと同じなので、「嫁ぐ」という漢字が使われるようになったのです。

逆に言うと、「跡継ぎを産む」ということ、または「育てる」ということは、このような言葉に表されているほど重要なものと考えられていたということになりますね。近年「産む機械」などといって非難されましたが、男尊女卑の江戸時代でもそのような考え方はしていませんでした。実際に「育てる」というところまで、もっといえば「家を継がせる存在になるまで育てること」が重要なのであって、産むだけで終わりではありません。その辺の認識をちがえると大きな問題になってしまいます。

「嫁ぐ」ということは、まさに相手の家に入り、相手の家を継ぐこと。家の繁栄を願う和歌や文章が多い日本の文化において、そのことがどれほど重要だったかは、想像に難くありません。

2 結婚と三々九度

それでは、女性はいつ「家」そのものになるのでしょうか。先ほど申しあげましたNHKの松平定知アナウンサーの『『さん』と『さま』の使い分けが完璧だった』ということばの謎に迫りましょう。

最近ではチャペルで結婚式を挙げる人も少なくありませんが、日本では基本的に神前で結婚式を挙げます。もちろんお寺でもできるようですが、お葬式のイメージが強いお寺では、なかなか結婚式を挙げる人はいないようです。

神前での結婚式は基本的に、宮司のお祓いの後、祝詞奏上^{のりよ}、三々九度、そして舞などの奉納、と大きく分けるとこのような順番で行われます。祝詞は、宮司が神様にする「この2人が今度結婚します」という報告です。この報告は、そのまま家と家が結びつくということも奏上されます。

そして、次の三々九度です。三々九度とは、もともと「三献の儀」であるといわれています。「三献の儀」とは、結婚式にあたる祝言に限らず、軍の出陣や帰陣、そのほか何か勝負の門出など、重要な節目の際の献杯の礼のことを言います。縁起の良い打ちあわび、勝ち栗、昆布の3品を肴に3度ずつ御神酒を飲み干すのです。御神酒がない場合は神棚に上げたお酒を飲みます。この「三献の儀」は武家の風習であり、奈良や平安の貴族の風習とは違います。ですから出陣など重要な「門出」での受け儀式として現代に残っているのです。この出陣での三献では、3献目の盃を飲み干した後にそれを地面に打ち付けて割り、大将が鬨の声を挙げて陣営を鼓舞するものでした。

この「三献の儀」から、人生の新しい門出である祝言で三々九度を行うようになったのです。通常の「三献の儀」ではなく、小盃 新郎→新婦→新郎・中盃 新婦→新郎→新婦・大盃 新郎→新婦→新郎というように三つの盃で3献ずついただくので合計9献、神前で行うことによって夫婦と家の絆を深めるということになるのです。

なぜ「三」なのかといえば、それは奇数が陽の数でありその1番初めの数字「一」に続く次の数字で、これから永久につながってゆくという縁起が良い数字だからです。点が線になるという意味で理解していただいた方が良いでしょう。また、「三」は「満つ」や「充つ」に通じ、また「さん」というと「参る」に通じ、人が集まるとして非常に縁起が良いとされていたのです。

その「三」を「三回」行うことで、陽の数字の最大数「九」になり、人生という長い道のりの新しい門出で、最も目出度い方式で行っていたのが「三々九度」なんです。飲み方も縁起の良い数字である「三」にこだわり、一つの盃を3回に分けて飲むしきたりになっています。

また三つに分かれた盃の意味は、小盃は過去を表し、新郎新婦の巡り合わせを先祖に感謝する意味が込められています。中盃は現在を表し、2人で末永く力を合わせ生きていくとの意味が込められています。また大盃は未来を表し、一家の安泰と子孫繁栄の願いを込めています。

このようにして、神前で神の意思に従い二人そして二つの家が結びつくことによって、二人と二つの家の「固め」の盃を行うことになり、そのことによって夫婦が出来ます。そして、その神の前で三々九度を行った時が、新婦が家に入った時ということになります。まさに神が認めた夫婦ということになるのですね。

松平アナウンサーの発言であったように「さん」と「さま」も、また、高円宮典子さまが千家典子さんに変わったのもその時なのです。

日本では、神前において神様に誓った時に、家が変わると考えられています。そのために、神前の婚礼ではそのような考え方になるのです。ですから、よく友人などを呼んで行うパーティーのことは「披露宴」といいますね。これは、新しく家を作ることになった二人とその元の二つの家が、友人や上司、または仕事などで関係のある人、場合によっては近所で親しくする人などにも「新しい家」「新しく一員になった家族」をご披露するということが「披露宴」といいます。あくまでも披露する宴で、そこで婚姻が行われるものではありません。

3 大国主命の妻問い

さて「三々九度」についてみてみました。しかし、その「三々九度」は武家の習慣であるということでした。ではその前は、婚姻はどのようにになっていたのでしょうか。

まず神話の時代はどうでしたでしょうか。神話の時代で結婚が書かれているのはやはり「古事記」の「国生み伝説」です。

「天の神様方の仰せで、イザナギの命・イザナミの命御^{おふたかた}二方に、『この漂っている國を整えてしつかりと作り固めよ』とて、りつばな^{ほこ}矛をお授けになつて仰せつけられました。それでこの御二方の神様は天からの階段にお立ちになつて、その矛をさしおろして下の世界をかき廻され、海水を音を立ててかき廻して引きあげられた時に、矛の先から滴る海水が、積

つて島となりました。これがオノゴロ島です。その島にお降りになつて、大きな柱を立て、大きな御殿をお建てになりました。」

そして「イザナギの命が『そんならわたしとあなたが、この太い柱を廻りあつて、結婚をしよう』と仰せられてこのように約束して仰せられるには『あなたは右からお廻りなさい。わたしは左から廻ってあいましょう』と約束してお廻りになる時に、イザナミの命が先に『ほんとうに立派な青年ですね』といわれ、その後でイザナギの命が『ほんとうに美しいお嬢さんですね』といわれました。」女性が先に言葉を発したことで、蛭小島が出てきてしまい、天に相談に行くようになってやり直します。そして、今度は伊邪那岐命が先に言あげして、淡路島と四国とを生んだのです。

このように、古代の結婚は、神の宿る柱を男女が回り柱の向こう側で出会って、男が先に言い上げることによって行われていたということがわかります。日本の場合は男性が先に女性を見初め、そして男性が女性本人または女性の父兄に話をするによって婚姻が成立するようになっていったのです。それはもちろん昔の話で、今は女性の方から話をしたり、告白をする方が多いかもしれません。

婚姻の場合は、まず男が妻となる女性を求めましたが、これを「つままぎ（妻求儀）」といいました。そして結婚の申込を「つまどひ（妻問）」といいました。

こうした「つまどひ」に対して、女性が承諾するところに婚約が成立したのです。

男女の出合いの場には、五穀豊饒を祈ったり、また取り入れの祭礼に、男女が歌い踊る歌垣というものがありました。よくお祭りなどで男女が会ったなどという話があります。祭りの中で男女が歌を歌い合つて、求婚をしたり、あるいは婚姻を申し込んだり、場合によっては逢瀬を重ねたりというようにしていたのです。

求婚を申し込まれた娘は父兄に身のふり方について相談して、その父兄が反対をしなれば、男性と女性の間には縁談が成立します。そして婿になる人は娘の家で挙式するのです。

当時の結婚は通い婚といわれるものです。男性が女性の家の一定期間通い、後に新たな家居を建ててここに同棲することになります。

この婚姻の方法、「妻問い」は、やはり「古事記」にある大国主命の神話で有名ですね。

大国主命が八千矛神という別名を使っていたころのこと。高志国の沼河比売ぬなかわひめという美しい女神がいることを知ります。八千矛神は「高志国に賢い、美しい女神がいると聞いてやって来ました。」と歌を歌ったところ、沼河比売は戸を開けることなく「今は、わたしの心はわたしのものですが、後には、あなたのものになってしまうでしょう。」と歌を返しました。

これで二人は会うことができました。しかし、大国主命の正妻であった須勢理毘売命すせりびめのみことがひどく怒ってしまったので、奈良に帰る大国主命は「愛しい妻よ。わたしが出て行ってしまったなら、おまえはうなだれて悲しむのだろうか。」という歌を送りました。これに対して須勢理毘売命は「ヤチホコ神よ。わたしのオオクニヌシよ。あなたは男ですから、あちこちに妻をお持ちでしょう。でもわたしは女ですから、あなたのほかに夫はありません。」という歌を歌い、今では大国主命と須勢理毘売命が並んで出雲大社に鎮座しているのです。

大国主命は本来国づくりの神ですが、出雲大社は恋愛のパワースポットとか、縁結びの神様といわれています。一度浮気をして外に行った大国主命が須勢理毘売命の歌でより一層仲が良くなったところから、通い婚の男性が自分のところに通うようになる。現代の世の中では、浮気した男が帰ってくるというような感じがあるのかもしれませんが。

4 貴族の世界の結婚と通い婚の制度

通い婚ということが出ました。通い婚とは、夫婦が同居せず、夫または妻が時々相手の住まいを訪ねて何日か暮らす形式のことを言います。今でいえば、「週末婚」などというような話になってしまい、あまり良い話ではありません。しかし、平安時代まではこの通い婚が通常の結婚の形式であったのです。

男性が女性の家に通う通い婚の形式は、万葉集や日本霊異記等に様々書かれています。しかし、最も詳細にそのことが書かれているのが「源氏物語」です。

飛鳥・奈良時代には、結婚は男子 15 歳、女子 13 歳で許され、その他、皇族と臣下との通婚を禁ずること、父母及び夫の喪のある間は、嫁取りを禁ずること、掠奪あるいは売買による婚姻を禁ずることなどが規定されました。

平安時代になるとこれらが制度化されてゆきます。後一条天皇は 11 歳の時、20 歳の藤原威子の入内がありました。双方の婚約が行われると、婿側から「消息便」が立ちました。もちろんこの時にその「消息便」が始まったのか、それより前なのかはわかりません。でもこの後一条天皇の時に「消息便」が出ていることはあきらかです。「消息便」には婿から嫁に対する恋文が書かれていました。この文は、「文使」ともいわれる消息便の使いが柳の枝に吊して嫁方の家へ持っていき、女性の代わりに、その父兄が相手の人物、家柄などを確かめて返書を送る風習がありました。

「栄花物語」にある藤原長家の歌に、

「夕ぐれは待遠にのみ思ほへていかで心のまづはゆくらむ」

(婚姻の夜が待ち遠しくてたまらない。どうしたら心だけでも先に行くことができるだろうか)

というような歌が残されています。

結婚生活は基本的には、男が女のもとに通う通い婚でした。そのほか男が女の家族と同居する場合や、夫婦が独立して住居を構えることもありました。しかし女が男の家族のもとに同居する例は殆どなかったとされています。現代でいうような嫁姑戦争のようなものは、この通い婚の場合はあまりなかったのです。

通い婚の場合、新婚早々には男は足しげく女のもとに通いました。それは好きな女性の元ですから、毎日でも女性のところに行ったでしょう。しかし女性が妊娠したり、あるいは男

に他の女性ができたりして、男性が通ってこなくなってしまうような場合もありました。そのような場合は、女性は自分の家で待つしかなかったのです。万葉集など古代の歌集の女性の歌には、自分の好きな男性の到来を待ちわびる女性の歌が、それこそ数多くあります。また、今昔物語にも巻27第24話に「死んだ妻とただの一夜逢う話」という話があります。

妻を置いて東国に赴任した男が、そのまま東国に居ついてしまい、たまたま京都に戻った時に昔の妻の住む場所にいると、妻が一人で待っていました。そのまま一夜を過ごすが、朝になったら骸骨と一緒に寝ていた、という話です。まさに通い婚であるから、女性が待っている間に亡くなってしまい、男性がそのことを知らないなどという悲劇も少なくなかったのではないのでしょうか。

5 男尊女卑と女性中心の家族のかかわり

ではなぜこのように通い婚が成立し、また、通い婚によって天皇から消息便が届くようになったのでしょうか。

それは、日本が女性中心の母系家族を作っていたからという説があります。日本は平安時代の後期に武士が台頭するまでの期間、先史時代より、女性が中心の、というよりは母系の集団が成立していたのです。

これは、古事記の天照大御神が女性であり、素戔嗚尊すきののみことが男性であるということをもわかります。伊邪那岐命は、三貴神のなかで女性である天照大御神に昼の世界の統治を任せ、素戔嗚尊には海を与えています。これは、男性は漁などに出て、屋間の村の中は女性が支配していることを象徴しているといえます。このほかにも女性の神が祀られていることが多く、ほかの宗教とは全く異なる形になっています。

日本人は古くから、新しい命を生み出すものに対して非常に強い力を感じていました。恐れると同時にその力を祭るということをしていたのです。ではその力とはどこにあったのでしょうか。「太陽」「大地」そして「女性」が物を生む力の源と考えられていたのです。

太陽は高天原にあって、毎日日の光を注ぎ様々な者を育てます。植物も太陽がないと育ちませんし、ほかの物も太陽がないと暗いままになってしまいます。何よりも、天岩戸の神話があるとおりに、太陽がないということに非常に恐怖を感じていたのではないのでしょうか。

大地は、種をまけば、その種が大地の栄養を吸収して育ちます。種ひとつから、木の実が何万倍にもなって出てくる。特に稲作の耕作を行っている状態では、なおさらのことです。

そして女性です。女性は子供を産みます。古代社会は、現代のように科学で物事をわかっていますから、女性の体の中になぜ新しい命が生まれるか、しっかりと説明できませんでした。そのために、女性の中に「黄泉の国」とつながる道があると考えられ、その道から新たな命が生まれてくると考えられていたのです。また、生まれてしばらくの間は、黄泉の国の食べ物が母乳として出てくると考えられていたのです。

男性は、女性を非常に恐れると同時に、尊敬するようになります。黄泉の国の道の近くに

いると自らが黄泉の国に引き込まれると思いながら、女性と一緒にいないと子孫を残せないというような考え方になるのです。結局、通い婚と女性を中心にした母系家族となってきたのではないのでしょうか。

この考え方が、平安後期に武士が台頭し、武士的、要するに男性的な考え方が来るようになり、男性中心の価値観に変わります。江戸時代にはそこに朱子学の教えが入って、「男尊女卑」という考え方になるのです。なお、これも現代では「カカア天下」の方が多くなっているような感じも少ししますが、その点は、文化が変わったのではなく、ある意味で昔の感覚に戻ったのかもしれない。

日本の婚姻文化には、この平安時代以前の考え方と武士的な考え方、そして、現代の自由で個人的な考え方、すべてが混ざっているということができないのではないのでしょうか。